



図書館だより

2018.11
No. 30

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191 (代表)
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

私をつくってくれた本

三戸 浩

(経営学部長・経済学研究科長)

経営(学)とは「組織の環境適応(の学)」だ、というのが、近年の経営学の定義と言っていいだろう。これは、経営学が企業・組織も生き物同様に「生存(存続)し続けること」が何よりも大事である、という認識に立つようになったからだ(かつては「利潤追求の学」と思われていた)。環境適応のために何よりも重要なのは、「環境認識」であり、自分の周りの環境の理解であり、環境変化の察知である。そのためには適切な情報を入手することが必要だ。適切な情報を入手しなければ、適切な意思決定はできないことは、言うまでもあるまい。

昔(江戸時代以前)の人たちは、人から学んだと聞く。自分の経験・見分を補うため、年長者や異郷の人から話を聞いた。江戸時代から、日本人の識字率は高く、都市では書肆(書店)があり、町人・農民も読書もしていたようだが、人からの話が大事で、人々は求めて人の話を聞こうとしたらしい。

現代では、人々は、人の話よりも書籍から学ぶようになったが、それ以上に、テレビそしてインターネットから情報を得、学ぶ時代となった。テレビは便利で面白い。スイッチを入れていれば情報が入ってくる(もちろん、番組選択は必要だが)。インターネットの便利さはテレビの比ではない。検索ワードを入れれば、実に多くの情報は入手できる。この検索能力の高さこそ、インターネットが普及し、本、そしてテレビを「駆逐する」ようになった主たる理由ではないだろうか。

だが、「必要な情報を入手する」ということは、その前に「何が必要か」が前提となる。

大きく「自分がどうしたいのか、どうなりたいたいか」が不明確なら、得ようとする情報は僅かで、その場限り、ごく短期間有効な情報しか得ようとしまいだろう。「世界観、人生観」が確立して、はじめて「将来どうありたいのか」が明確となる。そのような「観」の形成のために歴史・哲学をはじめとする「(一般)教養」がかつては重視されていた。

私がどういう本を読むようになったかは、小学校時代の読書が決定的であった。M. ファラデー著『ロウソクの科学』(岩波書店)やG. ペレルマン著『三角形の魔術』(みすず書房)は、私をパズルやクイズ好きにしてくれたが、高校の数学を好きにはさせてくれなかった。一方、吉川英治著『三国志』(講談社)や子母澤寛著『勝海舟』(講談社)は、その後『新十八史略』(常石茂著、河出書房新社)を経て中国の歴史に関心を持たせ、また司馬遼太郎の全作品を読むに至らせた。そして、その歴史に対する興味は、経営学を研究する上でも役に立つような本にめぐり合わせてくれた。

私が多少は他の先生と毛色の違うことを語ることができているとするなら、それは40代に3冊の書物に出会ったからであろう。西部邁著『大衆の病理』(NHK ブックス)は大きかった。「経済成長」に対しては懐疑心があっても、「近代」や「民主主義」まで疑ってはいなかった私にとって、「資本主義社会」「組織社会」などの社会把握より「大衆社会」という捉えの方が、“Japan as No.1”でバブル経済真っ只中での「これでいいのか?」にピッタリ来たのだった。「進歩」という言葉に無邪気な信用は置いてなかったが、「伝統」は過去の人たちが選び残してきたものであり、現在生きている者たちだけの選択より、過去からの長期にわたる選択のほう

が信頼に足る」と教えられ、「新しいものを良しとするだけの“進歩”」に縛られ、伝統・保守というものを「古臭いもの」と思い込んでいた蒙を開かれた思いだった。「進歩」を懐疑（相対化）しだした私が次に巡り合ったのが、村上陽一郎著『科学・哲学・信仰』（第三レグルス文庫）である。自然科学に比して社会科学は「科学性」に劣る、中でも経営学は…、という風潮の中で、また実証研究が重視される傾向もあったため、「科学論」に関心が生まれていた。そんな中で、この本は、「宗教は主観的・信仰に過ぎないのに対し、科学が客観的・真理である」という常識を打ち砕き、「キリスト教が近代科学を産んだ」ことを教えてくれた。そのような私にとって佐伯啓思著『「欲望」と資本主義』（講談社現代新書）は環境問題をはじめとする様々な問題を惹き起こしている現代社会に対する、そして経営学が依って立つ資本主義経済に対

する認識も大きく変えることになった。そして現代社会を「歴史的視点」から見るようになり、岡田英弘著『世界史の誕生』（筑摩書房）により「歴史」とは何かを教えられ、川勝平太著『文明の海洋史観』（中央公論社）、『日本文明と近代西洋「鎖国」再考』（NHKブックス）が日本・アジア「後進国」という考えを修正してくれた。

人は無意識のうちに、その社会の「世界観、パラダイム」を刷り込まれ、そこから世界を見ている。だが、それを気づくことは極めて難しい。私は研究者・教育者として、現代社会と研究対象を相対的に見る視点を与えてくれた本に限りない感謝をするとともに、学生諸君・諸嬢に「本はいいぞお。面白いだけじゃなく、“理解する力”“ものの見方”を与えるのだから。時間が許されている学生時代に、ぜひ図書館に入り浸って、未来の自分の可能性を切り開いてほしい。」と伝えたい。

学生に薦めたい一冊
ダレル・ハフ著（高木秀玄訳）
『統計でウソをつく法』
（講談社ブルーバックス、1968年）

石田和彦
（附属図書館長）

日々の新聞やニュースの中で「データ」という字を見ることが多くなっている。インターネットの中や各種の電子化された取引から大量に収集される「ビッグデータ」の活用が言われ、さらに政府統計の世界でも統計として集計される前の個々の調査票を利用してマイクロベースの経済分析を行おうという動きが拡大している。政府・自治体の政策決定や企業の意思決定においても、経験や勘ではなく「証拠に基づく」（evidence based）ということが重視されるようになってきているが、その「証拠」の多くは何らかの「データ」である。

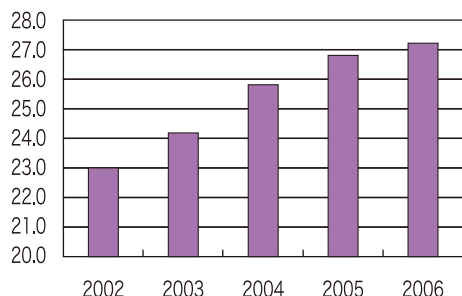
こうした動きを反映して、「データ・サイエンス」あるいは「データ・リテラシー」（データを適切に理解し、取扱う能力）とい

う言葉が一種の流行語のようになり、大学教育においてもそのための人材育成が求められるようになってきている。

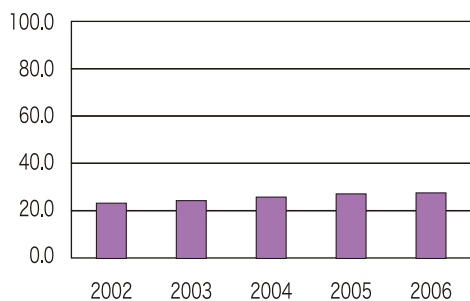
適切なデータ、あるいはその的確な分析に基づいて様々な意思決定が行われることが望ましいのは言うまでもない。しかし、一方で、そこには大きな落とし穴が潜んでいることも忘れてはならない。データの操作（多くの場合、悪意をもって行われる…）や、一見もっともらしいが実は誤っている分析（これも、故意に行われることが少なくない…）が人を欺き、結果として、意思決定を誤った方向に、時には、敢えて歪んだ方向に導くような事例が後を絶たないからである。

例えば、古い事例で恐縮であるが、現在に続くわが国の経済格差の議論の端緒の1つとなった本に、『ワーキングプア-日本を蝕む病』（NHKスペシャル『ワーキングプア』取材班編、2007年、ポプラ社）がある。その中で、「若者の間に非正規雇用者が増加し、それがワーキングプア（働いていながら貧困状態にある人）の原因になっている」との同書の主張の裏付けとして、「急速に不安定化

する若者の雇用」という表題をつけて以下のようなグラフが掲載されている（グラフは同じデータから筆者が再現したもの）。グラフは「15～34歳の非正規雇用者の割合」を示している。グラフの目盛等を注意深く見ず、棒の長さだけで判断してしまうような読者は、大半が「なるほど、確かに若者の非正規雇用が5年間で2倍にも増えている！」と誤って思ってしまうであろう。



しかし、全く同じデータを用い、グラフの縦軸の目盛を通常の0-100%に変えて描くだけで（次のグラフ）、グラフが与える印象は全く違うものになる。



どちらのグラフの印象が正しいのかを論ずるのは本稿の目的ではないが、このようなデータの操作に安易には騙されない「データ・リテラシー」を持つことは、極めて重要である。そこで薦めたいのが、ダレル・ハフ著（高木秀玄・訳）の『統計でウソをつく法』（原題：How to Lie with Statistics）である。原著の初版は1954年、今回紹介する翻訳書（講談社ブルーバックス版）の初版は1968年という古い本であるが、現代でも十分に通用する内容をもった名著であり、実際、2018年2月に第99刷が発行されている。既に古

典と呼んでもよい部類に入る本と言えよう。

本のタイトルは一種の逆説であり、中身は、上述したようなデータの操作や不適切な分析に基づく主張がいかに世の中に蔓延しているかを数多くの事例で示し、それらのどこがおかしいのかをわかりやすく解説しながら、そうした一見データに裏付けられたようにみえる主張に騙されない方法を説いている。

例えば、サンプルの偏り（エール大学卒業生への所得のアンケート調査の事例、等）、偏ったサンプルから導かれるとんでもない結論、平均値がまったく実態を示さない例、グラフの操作（上に掲げたグラフも、まさにその類である）、相関関係と因果関係の混同（敢えて混同して議論を捻じ曲げている例）、等が、豊富な事例に基づいて具体的に説明されている。そしてこれらの事例を通じて、ランダム・サンプリング、データの代表値としての平均値・中間値・最頻値の違い、データの分散と信頼性の関係、相関関係と因果関係の区別などの初等統計学の基本的な考え方が自然と理解できるようになっている。その意味で、本書の副題である「数式を使わない統計学入門」は、刺激的な書名よりいっそう適切に本書の実態を示している。

データ社会ともいべき現代を生き抜くためには、「データ・リテラシー」が不可欠である。本学でも、そうしたことを意識して、「統計学」を必修科目としているものと思われるが、多くの文系学生にとっては、次から次へと数式が登場する統計学には苦手意識が強いようで（実際、「 Σ 記号を見るだけで敬遠したくなる」といった声をしばしば聞く…）、残念ながら十分に身につけているとは言えないように見受けられる。そのような学生には、是非、本書を一読して頂きたい。

ただ、前述したように本書は古典ともいべき名著であるが、挙げられている事例の多くが1940～50年代の米国のものであるため、今の学生には、事例の裏側にある事実（当時の米国の制度や習慣等）がややわかりにくかったり、数字がいかに非現実的にみえて（例えば、「エール大学の卒業生の年間平均所

得が25,000ドル」で、しかもこれは過大推計の事例、等々)、読みにくい面があることも否定できない。そうした理由で、本書を読んでも今一つすっきりしなかった方のためには、以下のような類書を挙げておきたい。

ジョエル・ベスト著(林大・訳)『統計はこうしてウソをつく—だまされないための統計学入門』(2002年、白揚社)

同『あやしい統計フィールドガイド—ニュースのウソの見抜き方』(2011年、白揚社)

神永正博著『ウソを見破る統計学—退屈させない統計入門』(2011年、講談社ブルーバックス)

神永正博著『ウソを見破る統計学—退屈させない統計入門』(2011年、講談社ブルーバックス)

ともにパンを食べる

馬場晋一

(経営学科講師)

米エール大学の研究グループは、読書は寿命を延ばすとの結論に達した。その一連の研究によれば、読書は知的レベルを伸ばすのに有益であるばかりでなく、寿命を延ばす助けになるという。一週間に少なくとも3時間半、読書する人は、全く本を読まない人に比べて、早死にするリスクが23%減少する。さらに同研究の別グループは、脳卒中や心血管疾患のリスクを高める要因となる、ストレスの解消につながるということが明らかにされた。

理系の研究というのは、かくも実益が明確である。チームで実験や観察を繰り返す、実証を重ねることで、真相にたどり着く。筆者の専門分野は、文系の中でも取引を扱う分野であるから、その研究への視点は、真に人間社会の現実に目を向けるべきものであると感じている。

筆者が属している分野は、広い意味で経営学である。経営学は、社会科学に属する。

「社会科学が問う問題は、人間の意思が働く領域であり、社会の変化とともに、新たな問題を生み出す。現実の社会の営みに目を向け、変化のある所に研究の領域が広がっているものだ。」

かつて、私が、師から教わった言葉である。その意味で、経営学の研究者は、社会情勢に敏感でなければならない。営みと生業のある所に、経営学は広がっているからである。

その点で、経営学に求められる課題はいつも新しい。しかし、古典を軽視するべきでは

ない。古典から滋養をくみ取る基礎研究は、社会が進化し続ける中でも常に必要とされてきたところである。古典の研究により、過去の知識の蓄積が現代の社会問題を解明することもある。

一般に、経済学で「生産者」と総称できる主体も、経営学には、「企業」、「会社」と様々である。

私たちが一般に用いる会社(company)とは、企業(enterprise)の一形態である。会社法にもとづいて設立されている、利益を上げることがを目的にする法人の1つで、「ともにパンを食べる」という意味から派生したのだという。

companion(仲間、友人、連れ)という言葉からの派生であり、語源は後期ラテン語のcompāniōnで、ともに(com)パン(panis)を食べること(ion)という意味なのだとか。

また、英語では、食事や旅、仕事など、行動をともにする相手のことを広く指す言葉なのだそう。意外と、英語圏の解釈においても、日本の会社経営の手法に通ずるような解釈の源流があるではないか。

日本では、長く「日本的経営」が日本の高度成長期を支えた。終身雇用、年功序列、企業別労働組合…筆者もかつては信奉した理念であったが、もはや、その慣行も崩れ始め、現在では、正規雇用、非正規雇用の別や、就職か起業かという議論が囁かれるようになってきた。

「ともにパンを食べよう」そうして生み出される会社はどれだけあるのだろうか、また、そのような気持ちで仕事をする企業人は、現在のどの程度いるのだろうか。

大学生に薦めたい一冊

黒岩美翔

(国際経営学科講師)

2018年4月に本学の経営学部国際経営学科へ赴任してきました、黒岩です。皆さまどうぞよろしく願いいたします。

さて、赴任してきてさっそく『図書館だより』執筆の依頼を受けまして、何について書こうかと非常に迷いました。わたくしの専門である会計の本を紹介しようとも思いましたが、せっかくですので、堅苦しい話は置いておいて大学生にぜひ読んでもらいたい本について紹介しようと思います。

突然ですが、わたくしの子供のころの話をしますと、実はあまり読書が好きではありませんでした。小学生の頃から大学生になるまでの間においては、数え切れるほどしか図書室で本を借りたことがありません。本を積極的に読むようになったのは大学生からです。しかし、そのような学生時代を過ごしながらかも、ある小説家の本は積極的に読むようにしておりました。皆さんもご存じだとは思いますが、その小説家とは村上春樹氏です。なぜ、私が村上氏の本を読むようになったのかといいますと、家にあったエッセイ『「そうだ、村上さんに聞いてみよう」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける282の大疑問に果たして村上さんはちゃんと答えられるのか?』(村上春樹著、朝日新聞社)が非常に面白かったからです。

この本は、1990年代に村上氏がインターネット上で読者から寄せられた質問に答えていったものをまとめたものになります。1990年代というと学生の皆さんはまだ生まれていないか、生まれたばかりの頃だと思います。そのような時代に出版された本ではありますが、不思議と古びた感じはありません。むしろ、学生の皆さんくらの年代にぜひ手にとってもらいたい本であります。きっと何かしらの刺激になると思います。そして、今までと違った視点で物事を考えられるようになる

きっかけになると思います。内容は前述したとおり、村上氏が読者から寄せられた様々な質問に、独自の見解を用いて答えているものです。この本を読んでから、わたくしは村上氏に興味を持つよ

うになり、彼の小説を読むようになりました。

なぜ、この本を学生の皆さんにお薦めするのかといいますと、ここでの質問者の大半が大学生以上だからです。つまり、皆さんがこれから直面する可能性がある問題であったり悩みについて村上氏がなにかしらの答えを提供しているのです。

興味がない方も是非読んでみてください。この本のなにか面白いのかというと、村上氏の返事が示唆に富んでおり、ユーモアがあるのはもちろんのこと、読者から寄せられる質問内容も面白いものが多いからです。

また、この本を読んでいると、世の中には実に様々な悩みを抱えている人がいるものだと感じさせられます。仕事の悩み、人間関係の悩み、今後の生活に関する悩みなど、またくだらないものから深刻なものまで。いや、くだらないように見えても当事者からしたら深刻な悩みかもしれません。しかしながら、村上氏の返事を読んでいると、どんな悩みでもどうにかなるのではないのかという気持ちにさせられるのです。

実家に帰ると必ず一度はこの本を読むのですが、本当にいつの時代に読んでも色褪せることはありません。そして、自分が成長するにつれてこの本への見方もだいたい変わっているのですが、いつも新しい発見があるのです。この本に出会ったのは小学生の頃でしたが、一生手放せない一冊だと思っております。



加えてもう一点、村上氏の本を読んで影響を受けたことがあります。本書を含め、氏の本のなかでは度々、生活の一部として運動に関するシーンが必ず含まれています。小説に出てくる登場人物たちは必ずと言っていいほど水泳やランニングなどの運動をしておりますが、彼自身も毎日数十キロランニングをしているといった話が出てきます。ですので、彼の本を何冊も読むうちに、私も影響を受け

ていつの間にかランニングを始めていました。今は生活環境がかわりましたので、以前のように頻繁にはできていませんが、それでも時間に余裕があるときは走るようにしています。

話は逸れましたが、本を読むのが苦手な人もぜひ、こういったエッセイを読んでみてはいかがでしょうか。きっと何かしら将来の糧になってくれることと思います。

古典を読む 原典に還る

吉 居 秀 樹

(公共政策学科教授)

本あるいは図書館に関することについて、このような場で、文章を書くことには躊躇する気持ちがあります。それは、私自身に、本一般についての十分な知識がないだけでなく、個別の本を照会できるだけの能力、さらに、それらのことを文章にする能力あるいは資質に欠けているからです。ただ、このことが図書館運営委員の役割の一部であるとの一点で、いま、パソコンに向かっています。

このように言うてはみても、私の大学学部を選択とそこからの勉強の始まりは、「本」を巡ってのものであることは、間違いありません。私事ですが、大学へ進学する前の数年は、体調を崩し入退院を繰り返していたのですが、その入院中に読んだ本がきっかけで、当時は工業高等専門学校の機械工学科に在籍していましたが、進路を変更し法学部へ進学することを決めました。以前、この「図書館だより」で紹介されていたように記憶していますが、丸山眞男著『日本の思想』（岩波新書、1961年）がその本です。私は、1973年の版で読んでいたようですが、単なる時代区分ではなく「近代」とは何かということを問うてある内容に引きつけられました。当時は大学については何も知るよしもありませんので、その本の内容を理解したいと言うこと、このようなことを可能にする勉強ができる場所が法学部であろうというくらいの認識でし

た。

あとから思うと不思議なことですが、法学部に進学して、入学早々に最初に出会いどのような本を読んだらよいかについて相談した先生が、大学は違うのに丸山眞男さんのゼミへの参加を許され実際に学んでおられたことのある（当時は、Hegel著『Phaenomenologie des Geistes（精神現象学）』がテキストであったとのことでした）憲法の滝澤信彦先生でした。しかし、同時に、滝澤先生に相談をし指導を受け始めた頃、私の体力は快復せず勉強を続けることすらおぼつかない状態であったので、健康が戻るまで休学をしようと考えていますと言ったところ、先生からは「そういうことは止めなさい。人生は短く時間ももったいないから、一緒に勉強しましょう。一人ではくじけてしまうことがあるので、一緒に勉強する仲間を見つけてもう一度いらいっしょい」と、予期せぬ、しかし忘れられない言葉が返ってきました。

ここから、私の大学での勉強が始まりました。曜日は忘れましたが、毎週一回、授業が終了してから新幹線の最終便で先生が帰宅されるまで、研究室での本を輪読していくという自主ゼミの始まりです。この仲間は後では専門演習で指導を受けることになるのですが、それとは別に、4年生まで続きました。最初のテキストは、E.フロム著『Escape from Freedom（自由からの逃走）』（Avon）でした。1年生の間は読み続けましたが、なにぶん原書を読んでいくのは初めての経験ですべてを読み終えることはできませんでした。しかし、社会心理学の領域の本でしたが、人が

自由になることを放棄し、自ら権力へ服従することがあるという内容は新鮮なものでした。次のテキストは、H.Kelsen著『Wom Wesen und Wert der Demokratie (デモクラシーの本質と価値)』でした。ドイツ語の文献でしたが、国民主権と民主主義を正統化する理論とその論理を、鮮やかに描き出した内容に、わくわくしたことを思い出します。毎週読み進めたページはわずかであったのですが、ほぼ読み終えることができました。次は、Hegelの『法の哲学』でした。先生の方からは『精神現象学』をということでしたが、私たちの方が尻込みをして『法の哲学』に落ち着きました。原題は『Grundlinien der Philosophie des Rechts order Naturrecht und Staatwischenschaft im Grundrisse』(Verlag Ullstein GmbH)ですので、自然法と国家学を統合させようとする壮大な構想のもとに書かれたことがわかります。いずれにせよ、

「近代」とは何かを理解しようとするには欠かすことのできない書であることは間違いありません。これも読了することができました。少しずつの積み重ねの大切さを思います。

このような勉強会と並行して、憲法あるいは公法学の基礎にある「国家学」を造り上げてきた、T.ホンブス、J.J.ルソーそしてヘーゲルへ連なる思想家の本、そして最終的には、ちょうど当時刊行されていたイェリネク著『一般国家学』(学陽書房)を、こちらは翻訳書ではありましたが、系統立てて読むという指導を受けました。

このような中で、私は、繰り返し、古典を読むことの大切さ、そして原典へ戻ることの必要さを教えられてきました。今、改めて、このことの意味を、現代のような即効性を求められる時代だからこそ、これを読んで下さった皆さんへお伝えしたいと思います。

電子書籍の活用法

後藤正之

(実践経済学科教授)

「いいえ。洋書は専ら電子書籍で読みますので。」

私の研究室を訪れた人が、本棚を見回してから「和書ばかりですね。洋書は読まないのですか？」と尋ねたことがあります。上記はその時の答えです。

私が洋書を読むときは、専ら Amazon の電子書籍版を購入し、Kindle という専用ソフトを使って読んでいるため、紙の本の蔵書量が少ないのです。

洋書を、電子書籍版で読むことの利点は幾つかあります。

第一に、場所を取らないことです。

特にアメリカの教科書や専門書で顕著なのですが、大変懇切丁寧に記述されていますので、自ずと文字数もページ数も多くなります。加えて紙の書籍ではハードカバーが用いられ、重さも厚みもたっぷりあることが多いため、

すぐに書棚スペースが占有されてしまうのです。その点電子書籍版だと、こうした物理的な問題から解放されます。

(余談ですが、この利点があるため、コミックの単行本も殆ど電子書籍版で読んでいます。)

第二に、デジタルの利点が大いに活用できることです。

Kindle 上では、文字のサイズを自由に変更することができることです。老眼の身には印刷された小さな文字を読むことは辛いのですが、そうした苦労をしなくても済むのです。

ハイライト (蛍光ペンで色をつけて強調するイメージです)・メモ・しおりなどの機能も効果的です。ハイライトについては、設定次第で、他の読者が同じ本でどの箇所をハイライトしているかを知ることができます。メモやしおりについては、紙片のように、紛失することがありません。

また、検索機能がとても便利です。ある単語が本の中でどこに出てきたのか・出てくるのかをリストで表示することができ、その箇所に直ぐに移動することができます。概念の

定義などを初出時に遡って確認するときに、大変重宝します。

加えて、電子辞書が利用しやすいこともあります。Kindleでは英和・英英の電子辞書が掲載されており、分からない単語を即座に調べることができます。

さらには、埋め込まれたハイパーリンクによって、インターネットにシームレスで接続できるメリットも絶大なものがあります。その本だけではなく、より深く、あるいはより幅広く、情報を収集することが可能になるのです。

第三に、話題の新刊を即座に入手できることです。紙の書籍では、発売日から入手できるまでの間にどうしてもタイムラグが発生しますし、洋書の場合には多額の送料がかかります。また各政府機関や国際機関が発行するレポート類でも、ホームページ上でPDF版が無料で提供されている場合が多く、紙の形で買い直す必要性が少なくなっています。

では紙の書籍を利用しないようにするのか、といえば、決してそんなことはありません。紙の書籍を積極的に選択する場合があります。

その理由として、先ず利用可能性の問題があります。古い本は電子書籍化されていない場合も多いですし、新刊本でも電子書籍化されるまでに時間がかかることも希ではありません。このように選択の余地が無いケースは、意外と少なくはありません。

次に、紙の本ならではのメリットがあります。特に理論的・思索的な内容であれば、分厚い紙の書籍をゆっくり読んでいく事により、「読書」をしているという、かけがえのない充実感が得られます。またその逆に、ページ捲りしつつ斜め読みして概要を把握する、と

いう一覧性も、電子書籍版では味わうことができ無い長所です。

(またまた余談ですが、筆者が大好きな翻訳ミステリも、そうした理由から文庫本で読んでいます。)

そして何よりも、自分の知らなかった本との出会いは、紙の書籍に限られます。またそれを可能にするのも、図書館や本屋さんという、紙の書籍が数多く存在し実際に手に取ることのできる場所に限られます。確かにオンライン書店では、購入履歴や閲覧履歴に基づくお薦めが表示されますが、驚くほど壺にはまった提案が数多くあります。(これには統計学が大きな役割を果たしているのですが、その事はまた別の機会にしましょう。)

しかしながら、自分の関心から全く離れた分野の本や、絶版書を教えてくれることはありません。暇なときにふらっと本屋さん立ち寄って、意外な売り場で面白そうな本を見つける喜びは、何物にも代えがたいものです。しかし町中で本屋さんが少なくなってしまった現在、我々に身近で、しかし蔵書量が比べものにならないほど多い図書館こそが、それを提供できる場となっているのです。

たとえ同じ本であったとしても、紙の書籍と電子書籍版には、それぞれ異なった利点があります。それぞれの特徴を知った上で、効果的に使い分けをすることをお薦めします。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで(学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで)
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・大学閉校日など

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2018年11月22日